

法善寺横丁

きらびやかに賑わう道頓堀エリアから程近い場所にある法善寺横丁は、落ち着いた赤提灯と洒落た割烹料理店が並ぶ静かな石畳の路地です。

法善寺横丁は道頓堀川の南側に位置する千日前エリアの北西端から西に延びています。千日寺は千日間毎日参拝すると願いが叶うという信仰にちなんだ法善寺の愛称でした；千日前とは「千日寺の前」という意味です。何百年もの間、千日前は墓地や処刑場が置かれた陰気な地域でしたが、これらの施設は 1870 年頃に他所に移されました。空き地となったこの場所には、急速に映画館や寄席、学生や労働者向けの安い食堂が軒を並べるようになりました。まもなく、千日前は道頓堀付近の歌舞伎座にかわるカジュアルで安価なエリアとして定着しました。

大通りから隠れた場所にある法善寺横丁は、比較的洗練された客層が集う落ち着いた隠れ家的スポットへと発展しました。大衆の関心が映画に向かう中、この横丁の 2 つの寄席は、大阪の大衆を何世代にもわたって巧みな話芸で楽しませてきた落語の伝統を静かに守り続けました。法善寺横丁のバーやレストランで、落語家たちは常連客や道頓堀の劇場の役者たちと自由に交流していました。

法善寺横丁の料亭では割烹料理を扱っています；コース形式で提供される伝統的な懐石料理の洗練された味を、比較的親密でカジュアルな雰囲気の中カウンター席で楽しめます。

苔むした像、手書きの看板

道頓堀の店が派手で目を引く看板で知られるようになったのに対し、法善寺横丁はネオン看板ではなく落ち着いた赤提灯と木造の店構えを保ち、より控えめな美観を大切にしてきました。

通りの西端、お寺の外には、緑色の苔に覆われた不動明王の像があります。商売繁盛を願う参拝者が絶えず湧き水をすくってこの像にかけるため、この苔は常に青々としています。

法善寺横丁の東西の入り口には、地元の名士の筆による大きな木製の看板があります；東口の看板は落語家の三代目桂春団治、西口は舞台と映画で活躍した喜劇役者藤山寛美によるものです。藤山の看板は、「善」の字が一画抜けていることで有名ですが、その理由についてはいろいろな説があります。客に対してバーテンダーに「もう一本（一杯）！」と頼むよう暗に要求しているという人もいれば、藤山自身がこの看板を書いたときに悪戯っぽく

「自分はそんなに善い人間ではない」と言っていたと主張する人もいます。本当の理由は今と
なってはわかりません。